

岩崎純一歌集		『新純星余情和歌集』>羈旅の部				
歌集名読み		しんじゆんせいよせいわかしふ				
作者		岩崎純一				
通釈・語釈		園井長光、長光たき、戸井留子、武田あさゑ、蝶子、沙月式部、雪実少納言、岩崎純一(自釈)				
作者サイト		http://iwasakijunichi.net/				
和歌ページトップ		http://iwasakijunichi.net/waka/				
自撰日	羈旅の題	歌 岩崎純一詠	通釈	語釈	他歌人欄(評)	他歌人欄(派生歌など)
2008/7/29	別れの心	峰々の遠き別れの慰みにいつ こも同じ月もものかは	多くの山の峰々を隔てたお互いの金輪際の別れには、同じ月を見ているという現実も、何の慰めにもならない。	◇参照 「あかぬ別れの鳥は ものかは」(小侍従『新古今』) 「月見れば国は同じぞ山隔な りうつくし妹は隔なりたるかも」 (『万葉』)	◆否定的な本歌取りで、峰々を隔てた 余りに遠い別れには月も慰めになら ない、と歎いた歌 別れ際の激しい悲しみ 「月もものかは」という強い結句 (水垣久) ◆「同じ月」を「あかぬ別れ」の慰めとさ えしない。人との別れに慰めはないとす る積極的な断腸。(戸井留子)	
2009/3/27	旅	旅人の心はさても先を見ても みぢ葉かかる頃の梯(かけは し)	山の棧道に紅葉の葉が美しく降りかかっている頃のこと。 旅人は、心が折れそうになりながらも、前を向き、道を踏 みしめて進む。	◇本歌取 「旅人の袖吹き返 す秋風に夕さびしき山の 梯」(定家)		
2009/4/6	旅	夕日影連なる階(はし)に落ち 分けて旅の心にかなふ秋風	旅の途中、我が目前に現れた、長く連なる石段に、夕日 の光が段々に分かれて照り落ちていて、そこに秋風が吹 く。旅の情趣に叶った光景とは、これである。	◇参照 「ひとり聞くむなしき 階に雨落ちてわが来し道をう づむ木枯らし」(定家)		
2009/4/12	旅	花に紛ひ雪に消えゆく旅人の 行方の数に見ゆる月影	春は桜に紛れ、冬は雪の奥へと消えるように進む旅人。 その行き先の数と同じだけ、様々な表情の月が空に出て いることだ。	◇対句 「花に紛ひ//雪に消 えゆく」 ◇「雪月花」		
2009/7/1	枝垂桜	春はただ六義(むくさ)の心定 まらず巡り咲く園(その)のした れ桜に	春はまるで、腰を据えて和歌を詠む心に没入することが 難しい。六義園に咲きたれ桜のように、日本中に咲き巡 るしたれ桜の壮麗美のために。	◇六義園:東京都文京区 ◇『詩経』『古今和歌集』:六義 (風・賦・比・興・雅・頌)		
2009/12/3	旅	思ひやれ宿より宿に移る身の 幾夜跳めし旅の日(け)の月	月よ、思いやってくれ。宿から宿へと移動するたびにお前 の姿を見てきて、幾夜が経ったかも分からない我が身を。		◆「思ひやれ」は故郷の人への呼びか けであると同時に月への呼びかけ (水垣久)	
2013/1/19	都	時を経て流れあまたの人の影 息かしましき大江戸の道	大江戸は、時代を経て、道行く人々の息の流れのいつそ う激しく騒がしい東京となった。			